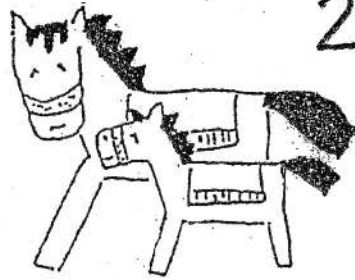


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
みせらす待ちまほ
ポクリポクリと。

20年 7月 NO.164



〒 760-0044

香川県高松市御坊町2-2

高松保育園内 地域子育て支援センター

TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857

<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～ 7月のプログラム～お気軽にどうぞ～

7月 5日	土	七夕かざりを作りました 10:00～12:00	七夕のお話や紙芝居、オルゴール、笹かざり づくりなどあります。お子さまとおいで下さい。
7月 19日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って いっしょにあそびましょう。
7月 19日	土	リフレッシュ講座 14:00～15:30	簡単なエアロビクスで体を動かして みましょう。(室内靴と託児予約要)
7月 23日	水	香川みずぶさんの会 14:00～15:30	香川の童話作家村山壽子(かずこ)さんの 作品を楽しめますのでどなたでもどうぞ。
7月 26日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も子育て体験に おいで下さい。
7月 26日	土	木工教室 14:00～16:00	手づくりの作品をふやして いきましょう。
7月 30日	水	健康・育児相談 10:30～11:30	小児科園医師にゆっくり 相談できます。(予約要)

出前保育 (14:00～15:00)

7月14日(月) わはは広場(大工町 電:822-5582)

出前保育 (11:00～12:00)

7月22日(火) 子育て“ほっと”ステーション

もこもこ(上之町 TEL:868-2251)

育児相談(月～土) 9:00～18:00

しつけや子育てについての悩み、
保育園生活、入園・見学について
の相談もどうぞ。

園庭開放 7月10日(木) 14時～15時

金子みすゞ童謡全集よ

ゆつきいと水の面を
も若の言つわばめは

死ひとまりは旅で
そこの枝よ、いてた

い若川無
いいや事
まつなで
まばぎ、たか
しために

やなぎ
楊とつばめ



当園でも急な発熱で38℃以上の場合には保護者の方に連絡をします。都合ですぐおむかえが来られない時など、保育者も保護者も受診を急ぐべきかどうか迷ったり、不安になったりします。いま一度、発熱について適切な対応ができるよう、小児科医師にくわしく聞いてみました。

子供の発熱についてA. B. C



1. ☆慌てずようすを見よう

昨年1月、生後8ヶ月のこどもの体が熱いを感じ、熱を測ると38.5℃あり、平熱を大きく超えていました。慌てて小児科へ行くと、医師は、「元気そうだし、心配ない。室内では服を1枚脱がせて」と言って念のための解熱剤をくれました。医師の指示通りにすると、3時間ほどで平熱に戻ったそうです。熱は体内に入ってきたウィルスや細菌の増殖を抑えようとするために出るもの。生後6ヶ月を過ぎると、母親の免疫がなくなり、頻繁に熱を出すようになりますが、熱の高さと病気の重症度は関係ないといえます。慌てず子どものようすや熱以外の症状を確認しましょう。

具体的には、顔色が悪く、ぐったりしている、いつまでも眠らずにぐずる、水分をとらない、頻繁に吐く、下痢をする、38℃以上の熱が数日間続いている——などのどれかに該当するようならば小児科医で受診しましょう。日本小児科学会のホームページ「こどもの救急」(<http://kodomo-qq.jp/index.html>)も参考になります。対象は生後1ヶ月～6歳。病院で医師に伝えるべき事柄や家庭での看護のポイントなども掲載されています。

2. ☆手足の温度で対応を見極めましょう。

子どもの発熱時、体は温めた方が良いでしょうか？それとも冷やした方がよいのでしょうか？

一般的に、熱が上がっている途中は、手足が冷たく、さむけなどで体がふるえるものです。この段階では、手足をさすってあげたり、布団を掛けたりして、体を温める必要があります。

逆に熱が上がりきって、手足が温かく、ふるえもなくなるようであれば、着物を1枚脱がしたり、体を冷やしたりして熱を発散させます。これをクーリングといいます。小児科医師が勧めるクーリングは、後頭部や脇の下、足のつけ根部分を、凍らせたタオルなどで冷やす方法。凍らせた保冷剤をハンカチに包んで使ってもいいでしょう。

おでこを冷やす人は多いですが、熱を下げる効果はありません。あくまで心地よく過ごすためのものです。また、おでこに張る熱冷まし用のシートでは、3年前、ずれて子供の鼻や口をふさいだ窒息事故が起きており、使う際は注意が必要です。

ただ、3ヶ月未満の赤ちゃんで38度以上の熱が出た時は、検査をしないと熱の原因が分からないことも多いので、病院に連れて行きましょう。

3. ☆解熱剤の使い方

症状をうまく伝えられない小さな子どもが熱を出した場合、解熱剤を飲ませて良いのか？

解熱剤は一時的に熱を下げて、体を楽にさせるためのもの。熱の原因になっている病気を治す効果はありません。そのため、「熱があっても、元気であれば、薬を飲ませる必要はありません。涼しい格好で過ごさせて様子を見てください」と言います。

飲ませるタイミングは、38.5度以上の熱があって元気がない、水分や食事をとらない、ぐずって寝付かないなど、子どもが明らかにつらそうにしている時などです。薬を飲むと、熱を下げる過程で汗が出るので、水分補給を忘れないように。食前、食後にこだわる必要はありませんが、食事と一緒に飲ませることは避けましょう。

ただし、生後6ヶ月未満の赤ちゃんについては、熱の原因をより詳しく調べる必要があります。薬を飲ませる前に、かかりつけの病院を受診しましょう。

市販の解熱剤を使っても良いものかどうか悩む親もいます。医師の処方薬でない場合、薬局で「アセトアミノフェンを選んで」と言ってみるのも1つの方法だと小児科医師は言います。購入時には、薬局で子どもの年齢や体重を伝えて、使用時には説明書をよく読み、用量を守りましょう。

大人用の解熱剤やかぜ薬は使わないこと。「年齢によっては、強すぎる成分が入っていて、副作用を起こす危険があります。」



4. ☆熱性けいれん落ち着いて

熱性けいれんは、熱が急激に上がるときに、乳幼児が起こすけいれんのこと。急に手足に力が入って全身がピクピクと動いたり、硬直したりします。時間は2～3分ほど。一度、熱性けいれんを起こした子の半数近くは、その後も発熱時に繰り返す可能性があります。ただ、小学校に入る前には、自然と治まる子がほとんどのようです。

小児科医師は、「熱性けいれんは、大人の悪寒と同じようなもの。命を落としたり、後遺症が残ったりという心配はなく、落ち着いて対処し、けいれんが治まってから受診してください」と言います。

けいれんを起こした時は、体を揺すったりせず、衣服などをゆるめて、そっとしておくこと。吐いたら、すぐに口をぬぐって顔を横に向けます。口にタオルなどを入れるのはやめましょう。「舌をかむことは、まずありません。むしろ、吐いたものをのどに詰まらせる危険があります」

子どもの様子を観察しておくことも大切です。けいれんしていた時間、手足の動きが左右対称だったかどうか、けいれん後の熱などは、医師が熱性けいれんかどうかを見極める判断材料になります。

一方、1日に何度も繰り返す、10分以上続く、意識がなかなか戻らない、熱がないのにけいれんするといった場合は、脳炎やてんかんなど熱性けいれん以外の病気の可能性があるので、速やかに病院へ連れて行きましょう。



カンボジアの赤ちゃんを救うには？



ASEAN [東南アジア諸国連合] の中で2番目に乳幼児死亡率が高い国、カンボジア。特に農村では、新生児破傷風が幼子の命を奪い続けています。先進国では根絶されつつあるこの病がなぜ脅威であり続けるのでしょうか。

無資格助産師で7割が出産

新生児破傷風は、発熱、けいれんなどを起こして生後28日以内に7割が死亡するとされる。カンボジアでは、2007年、50人の新生児がかかり、半数が亡くなった。

○ カンボジアの乳幼児 ○

・5歳未満の死亡率

1000人中82人

・5歳未満の主な死因

①新生児期の問題 30%

(新生児破傷風を含む)

②肺炎 21%

③下痢 17%

ユニセフ「世界子ども白書 2008」より

感染は、不衛生な環境での出産が原因の一つだ。サイムさんの出産を介助したカン・マンさん(73)は、へその緒を縛る糸も、かみそりも「煮沸消毒はしない」と話す。カンボジア保健省は、こうした専門知識のない助産師を保健センターに呼び、消毒液やゴム手袋を使う助産方法の講習を行い、出産環境の近代化に懸命だ。しかし、カンさんは、「講習で習った方法にはついていけない。」という。

カンさんが受け取る謝礼は、約5000リエル(約125円)や米など。一方、医療教育を受けた助産師や医師がいる保健センターで出産すると3万リエル(約750円)と6倍の費用がかかる。カンボジアでは、まだ7割が専門

知識に欠ける助産師の助けで出産するといわれる。

新生児破傷風を防ぐ手だてはある。母親が破傷風の予防接種を受けていれば、胎児にも免疫ができる。カンボジアでは、国内942カ所の保健センターの医療専門家が月に1度、村を巡回。希望すれば破傷風ワクチンを無料で接種してもらうことができる。

「注射の日は知っていたけれど・・・畑が忙しい」。コンボン・スプー州ロールス村のサイム・クンさん(47)も昨年5月に新生児破傷風で女兒を亡くした。それにもかかわらず、「注射どころではない」と言いたげな表情を見せた。

むしろ、「今夜、子どもに食べさせるものがあるかどうか」が切実な悩みだ。時給分しか賄えない水田で雨期に耕作した米に、時々、亀を捕まえて食べ、たまに街でココナツの実を売り、1回で5000リエル(約125円)の現金を得る。しかしこれでは、食べ盛りの子ども9人を養うにはとても足りない。

衛生に対する知識が不足していることに加え、農村にはびこる貧しさも新生児破傷風の温床なのだ。

(産経新聞・東京・朝刊より)

